

在リオデジャネイロ日本国総領事館

総領事 神谷 武



日伯黄金時代の新たな幕開けに向けて

リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所創立50周年記念に際し、心より祝意を表します。

50年前と申せば、1952年のサンフランシスコ講和条約発効と共にブラジルとの外交関係が再開され、戦後移民が開始、日本からの企業再進出も始まったばかりの頃と思われます。勇躍ブラジルの地に進出された日本の各社の駐在員の士気は高く、当時のリオ・デ・ジャネイロは、首都であっただけに、日本商工会議所の役割には大きなものがあつたと推測されます。

私がリオ・デ・ジャネイロに総領事として着任したのは、2003年8月、2年余り前になりますが、当地では、「昔は、よかった。」という話を、よく聞かされます。1959年のイシブラス社の操業開始に伴い、関連企業の進出があり、日系及び日本人在留者が増えました。1960年代から70年代にかけて、両国間では、ウジミナス社を始めとするナショナル・プロジェクトが推進されました。リオ・デ・ジャネイロ日本人学校は、1980年に児童生徒406名を数えたのが最盛期であったようです。資源国ブラジルとの相互補完関係の下に、日伯黄金時代が、このリオ・デ・ジャネイロを中心に、大きく花開いたことでしょう。

しかし、それも今は昔、その後の経済情勢の変遷と共に、状況は、大きく変わりました。

いわゆる日伯の「失われた20年」を経て、21世紀の今日、日伯関係の再活性化が論じられています。この20年間に、両国を取り巻く国際環境も、国内外の政治経済状況も変わり、両国間における相互のニーズも異なって来ています。

昨年9月の小泉総理の訪伯と本年5月のルーラ大統領の訪日を通じて、首脳レベルでの対話が進み、両国関係再活性化に向けての合意が行われました。新たな日伯関係の構築に向けての幕開けです。そして、この合意を受けて、具体的な施策が実施されようとしています。また、そのためには、両国間の人的交流を、あらゆる分野に亘って促進し、相互の理解を深め合うことが何よりも必要でしょう。

リオ・デ・ジャネイロは、首都時代からの歴史的・文化的資産を継承し、また、風光明媚な自然景観で人々を魅了するのみならず、ペトロブラス社、ヴァレド・リオ・ドセ社等のブラジルを代表する企業の所在地であり、経済産業の一大中心地であります。この地での良好なビジネス関係は、新たな日伯関係にとって、極めて重要と申せましょう。新たな「日伯黄金時代」の幕開けに向けて、リオ・デ・ジャネイロで活動する経済人の役割は大きいと思われまます。

リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所の益々のご発展を願う所以です。